

旭川地域におけるスキー観光まちづくりの特色と可能性 : 都市型スノーリゾート構築への提案

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	9
ページ	201-210
発行年	2018
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002698/

旭川地域におけるスキー観光まちづくりの特色と可能性 —都市型スノーリゾート構築への提案—

Features and Possibilities of Ski Tourism Town Planning in the Asahikawa Area

菊 地 達 夫¹⁾
Tatsuo KIKUCHI

I はじめに

周知のことではあるが、日本のスキー人口は、1992年をピークに減少傾向が続いている。その間、ニセコを中心とした外国人観光客の入り込み増があり、地域的には活況を呈しているところがある。また、2018年の韓国平昌冬季オリンピックの開催、2020年の東京夏季オリンピックの開催を控え、より外国人観光客の入り込みを期待するインバウンド・ツーリズムに注目が集まっている。そのため、スキー場をはじめとするスキー観光は、各地において差別化、地域的特色づくりが、今後ますます求められる。

ところで、最近におけるスキー観光に関する先行研究には、呉羽（2017a,b）、名倉ほか（2017）、渡邊ほか（2017）などがある。

呉羽（2017a）によれば、日本国内のスキーリゾートは、増加する外国人スキーヤー向けに多くの施設やサービスの提供がなされ、景観も外国人好みで日本には馴染みのないものが増えている。すなわち、欧米系のスキーヤーは、自国や欧米のスキーリゾートで経験し

てきた習慣を日本に持ち込んだ。それゆえ、楽しみ方の違いによって日本人のリゾート開発者ができなかった部分を、外国人が外国人スキーヤーの需要に応じて独自にサービスを展開したり、不動産開発・経営をしている。よって、日本国内のスキーリゾートは、インバウンド・ツーリズムの発展によって変化は生じているものの、そのイノベーションはほとんど外国人によってもちこまれたものであることを指摘している。

名倉ほか（2017）によれば、長野県野沢温泉スキー場では、2000年半ば以降、オーストラリア人を中心とした外国人スキーヤーの増加がみられた。とりわけ、当スキー場が、国際交流や複数の国際大会の経験などによって、受け入れが比較的円滑にすすんだことを強調している。また、経済的に疲弊した宿泊施設を外国人が買収した経営が増加している。地域の西洋化がすすむことで、野沢温泉における伝統文化が喪失する危険性について指摘している。

渡邊ほか（2017）によれば、長野県戸狩温泉スキー場の場合、周辺の宿泊施設が減少し

1) 北翔大学短期大学部こども学科

ていることを明らかにした。その理由は、スキー観光の縮小や後継者不足などによるものと指摘している。

以上の研究成果は、大規模なスキーリゾートを対象としたインバウンド・ツーリズムの実態を明らかにしているものの、中小規模のスキー場の様子については十分でない。渡邊ほか(2017)をみる限り、中規模スキー場の場合、大規模スキーリゾートでみられるような、宿泊施設を外国人が買収するような動きは少ないものと判断できる。よって、インバウンド・ツーリズムの影響は、中小規模のスキー場まで届いていないものと考えられる。

それゆえ、こうしたインバウンド・ツーリズムの急激な変化に、一定の中小規模のスキー場が集中する地域では、どのような対応をしようとしているか、検討の必要がある。

そこで、本稿では、研究対象地域として、旭川地域における都市型スノーリゾート構想を取り上げ、現状のスキー場の実態を明らかにし、どのようなスキー観光地域づくりが望ましいか、提案しようとするものである。具体的には、旭川地域における都市型スノーリゾート構想の背景と取組の概要を述べる。続いて、圏域のスキー場における索道施設、コースなどを取り上げ、どのような特色を有するのか、浮き彫りとする。最後に、構想と実態をふまえ、インバウンド・ツーリズムを中心として、どのような客層に焦点をあてるべきか提案する。

北海道に関係する日本版DMO¹⁾をみれば、広域連携DMO(5件)では、北海道(公社

北海道観光推進機構)、地域連携DMO(23件)では、大雪カムイミントラDMO、釧路観光コンベンション協会、千歳観光連盟、ふ

らの観光協会、地域DMO(13件)では、阿寒観光協会まちづくり推進機構が登録されている。旭川地域の都市型スノーリゾート構想は、大雪カムイミントラDMOに属する。また、スキーリゾートの関係では、富良野スキー場、トマムスキー場を含むふらの観光協会も登録されている。

Ⅱ 北海道におけるスキー場の分布の特色

本章では、北海道におけるスキー場の分布の特色を述べる。北海道は、ニセコ・倶知安圏、札幌・小樽圏といった中核となるスキーリゾートを中心とした集積地、ルスツリゾート、トマムリゾート、サホロリゾート、富良野といったスキーリゾートの単発型に分かれる。その他は、各地に多数の中小規模のスキー場が分布する。

ニセコ・倶知安圏では、ニセコヒラフ・花園が中核スキー場であり、ニセコアンヌプリ、ニセコビレッジなどが点在する。札幌・小樽圏では、サッポロテイネ、札幌国際、キコロが中核スキー場の役割を果たし、札幌藻岩、ばんけい、朝里川温泉、小樽天狗山といった中規模スキー場などが点在する。

単発型であるルスツリゾート、トマムリゾート、サホロリゾート、富良野は、ゴンドラリフトをはじめ複数のリフトを有し、初級・中級・上級に応じたコースをいくつかもつ大規模スキー場である。

北海道索道協会発行のスキー場ガイド(2017-2108)²⁾をみれば、93カ所のスキー場が掲載されている。地区別では、道南17カ所、道央16カ所、空知13カ所、道北26カ所、道東20カ所に分布している。ただ、実際には、

掲載されていない小規模スキー場も多い。よって、全体数では、100カ所以上のスキー場が実在する。また、スキー場の分布を詳細にみれば、札幌を中心とした道央圏に半数程度は位置する。

今回、研究対象とした旭川地域に限ると、9か所のスキー場のうち、カムイスキーリンクス、サンプレゼントパーク、大雪山黒岳、キャンモアスキービレッジ、ぴっぶの5か所が掲載されている。

北海道におけるスキー場の特色は、一部のスキーリゾートを除き、周辺地に宿泊施設を有さないことである。これは、大きく2つの理由が考えられる。1つは、スキー場と都市（市街地）との距離が近いため、宿泊する体制がすでに整っていること、2つは、スキー場の客層を地域住民に焦点を合わせているため、宿泊施設をあまり必要としないことである。前者の例では、札幌国際スキー場やサッポロティネといったスキーリゾートの場合、周辺地に宿泊施設がみられない。後者の場合、スキー場の管理運営が、小規模資本や自治体といったことが多い。また、スキー場は、索道施設は少ない上、コース数も少ない。こうしたスキー場は、周辺地の学校のスキー授業で利用されることが多い。

Ⅲ 旭川地域における都市型スキーリゾートの取組の概要

1 旭川地域における観光客の実態

旭川地域の年間観光客の入り込み数は、夏季が多く、冬季が少ない。こうした変動は、北海道全体の傾向でもある。例えば、旭川市中心部のホテルの客室稼働率（2016年度）は、

6月～9月90%超に対して、12月～3月72%に低下した。

他方、延べ宿泊数は、2012年度以降、増加傾向である。その要因として、外国人観光客の増加がある。とりわけ、アジア系外国人観光客が、76%（2015年度）を占める。一方、日本人観光客は、2014年度の1426泊数以後、微減となっている。他方、ニセコ地域の場合、延べ宿泊数のピークが1月となっている。

旭川地域における宿泊施設（全89件・全収容人数15935人）は、旭川市を中心に上川町、東川町に多く分布している。上川町や東川町の場合、層雲峡温泉や天人峡温泉といった温泉地に位置する。地域全体の収容人数の9割以上が、これら3自治体で占める。

以上から、旭川地域は、宿泊施設の地域的な偏りは大きい。ただ、他地域とは異なる都市型スキーリゾートの構築を目指すことで、冬季の延べ宿泊数の増加の可能性が高いものと判断した。

2 取組の概要

一般社団法人大雪カムイミンタラDMO（地域連携DMO）は、旭川市、鷹栖町、東

表1 旭川地域における宿泊施設の実態

地区名	施設数	客室数 (室)	収容人数 (人)
旭川市	32	3655	6381
上川町	27	1457	7211
東川町	18	455	1645
鷹栖町	0	0	0
東神楽町	1	46	248
当麻町	6	19	70
比布町	3	64	278
愛別町	2	20	102

資料）日本版DMO形成・確立計画への申請内容より。

神楽町、当麻町、比布町、愛別町、上川町、東川町の1市7町で構成し、2017年10月設立した。カムイミントラの名称は、アイヌ語で「神々の遊ぶ庭」を意味する。それ以前に、多数のDMO連絡協議会として、大雪広域観光圏推進協議会（1市7町）を、2014年に設置している。

大雪カムイミントラDMOは、観光庁のスノーリゾートの活性化に向けたモデル事業「スキーインバウンド裾野拡大事業」に選定された³⁾。具体的には、最大500万円の助成を受けて、集客策を採る。事業の期間は、2017年12月から2018年2月までとなっている。事業内容は、アジアの訪日客を対象として、語学が不安な日本人インストラクターと留学生

アシスタントがペアでスキー教室や雪遊びイベントを開催したり、複数のスキー場を手ぶらで巡回できるプランを提供したりして集客効果を調査する。

表2は、大雪カムイミントラDMOの取組概要を示したものである。取組の中心は、都市型スノーリゾートの構築である。具体的には、共通ICリフト券をはじめ、外国語案内、情報発信（冬季イベントなどを含む）、販売方法などの共通化、シャトルバスの運行、リフト券・宿泊・交通などがパックとなった旅行商品化、関連施設（観光協会、旅行事業者、宿泊事業者、飲食事業者、交通事業者など）との連携、ガイドなどの人材育成など多岐にわたる。とりわけ、先導的取組や人材育成を

表2 大雪カムイミントラDMOにおける取組（概要）

<p>【都市型スノーリゾートの構築に関する取組】</p> <ol style="list-style-type: none"> DMOが舵取り役となり、各スキー場の共通ICリフト券の発行や、外国語案内、情報発信、販売方法等の共通化、シャトルバスの運行、共通ICリフト券と宿泊や交通等がパックになった旅行商品化など一体的な展開を検討する。 圏域最大規模のカムイスキーリンクスをスノーリゾート地域構築の中核施設に位置づけ、旅行事業者や宿泊施設、交通事業者、飲食店等との連携による各種トライアル事業の実施、検証、商品化等の先導役取組やガイド等の人材育成の拠点とし、各スキー場への展開を検討する。 スキーのほか、旭川冬まつり、層雲峡氷瀑まつり、旭山動物園の「雪あかりの動物園」、ゆっきリンク、雪の美術館等、冬季の多様なイベントや雪に関わるアクティビティ、施設等の情報をスキーヤー等に提供する。
<p>【食×健康・保養×歴史・文化×自然を組み合わせた体験提供に関する取組】</p> <ol style="list-style-type: none"> スキーや登山、サイクリング等のスポーツ・アウトドア体験、森林浴等の健康保養体験、アイヌ民族の歴史や文化体験等のほか、農業収穫体験やフィッシング、野鳥観察など少人数の体験型の楽しさにもきめ細かく対応できる体制をDMOを中心に構築し、民間事業者とともに人材の確保・育成を図る。 スキー場利用者や登山客、サイクリング利用者のほかに、各種体験利用者のアフター（飲食、温泉等）につながる外国人観光客目線の情報（外国語メニューの有無、カード決済の有無、地元食材利用の有無等）をDMOが一体的に提供する。 スキー場利用者等の顧客（ファンクラブのようなもの）をリスト化し、夏季はサイクリング、登山、森林浴など健康・保養につながる多様な楽しみを提供する。
<p>【稼ぐ地元事業者と稼ぐ体制で稼ぐ地域づくりに関する取組】</p> <ol style="list-style-type: none"> スノーリゾート地域の構築に向け、カムイスキーリンクスで先導的取組や人材育成等を展開するため、DMOが同施設の指定管理の受託を目指す。指定管理により先導的取組等と併せて利用者の増加と収益基盤の確保を図る。 総合的な情報センターの運営管理を検討し、上記に関わる情報提供を一元的に行うとともに収益拡大を図り、DMOの運営資金を確保する。 DMOが情報提供機能付けSIMカード販売等を取りまとめることで、手数料収入を確保しながら、マーケティングにつながる情報収集も行う。入手した情報は、DMOのもとに設置するワークショップで多様な業種が合意形成を図りながら、提供商品等の見直し、改善を図る。

展開するため、カムイスキーリンクスを中核スキー場として位置付けようとしている。

以上から、取組の中心は、関係施設との連携強化による共通化・一体化を目指そうとするものである。その他の取組では、冬季以外のスポーツ、飲食、歴史文化などへ誘因しようとするものである。加え、地域の利便性として、各スキー場は、旭川空港や旭川市街地まで近接である点を強みとしている。とりわけ、旭川空港は、年間就航率99%と安定していることも優位性が高い。

対象とする客層は、3つに分けた。具体的には、ファミリー層の日本人観光客（第1客層）、台湾・中国を中心としたアジア系外国人観光客（第2客層）、欧米豪の外国人観光客（第3客層）である。とりわけ、都市型スノーリゾート構想では、外国人観光客の入り込み増加に期待している。2020年度の目標値

として、旅行消費額50.0（千円）、延べ宿泊者数2010（千泊）、リピーター率70%を設定した⁴⁾。

Ⅳ 旭川地域におけるスキー場の実態と取組の方向性

1 スキー場の実態

本節では、旭川地域におけるスキー場の実態について述べる。すでに述べたように、地域内のスキー場は、9か所ある（表3）。自治体別では、旭川市に3か所、東川町2か所、比布町、愛別町、当麻町、上川町に各1か所である。規模別では、カムイスキーリンクスが大規模、サンタプレゼントパーク、ぴっぷ、キャンモアスキービレッジ、大雪山旭岳、大雪山黒岳が中規模、伊の沢、あいべつファミリー、当麻町営が小規模に分けられる。また、大雪

表3 旭川地域におけるスキー場の実態（2017－2018）

		リフト数	コース数（%）	その他
カムイスキーリンクス	（旭川市）	ゴンドラリフト 1 ペアリフト 7	25 初32中36上32	非圧雪32% 全4000m
サンタプレゼントパーク	（旭川市）	ペアリフト 4	6 初40中50上10	全1000m
伊の沢	（旭川市）	ロープリフト 1	2 初60中40	ナイターなし 全250m
ぴっぷ	（比布町）	シングルリフト 3 ペアリフト 3	7 初30中50上20	全1200m
キャンモアスキービレッジ	（東川町）	クワッドリフト 1	6 初20中40上30	非圧雪20% 全1570m
あいべつファミリー	（愛別町）	ロープリフト 1	2 初	
当麻町営	（当麻町）	ロープリフト 1	1 初100	ナイターなし 無料
大雪山旭岳	（東川町）	ロープウェイ 1	2	ナイターなし
大雪山黒岳	（上川町）	ロープウェイ 1 ペアリフト 1	1 初50中30上20	ナイターなし 国立公園内 全1200m 2018年の場合、1月4日～ 2月16日は整備運休期間

資料）各スキー場Web情報より（2018年1月9日閲覧）。

山旭岳や黒岳は、国立公園内にある山岳地に位置し、他と周辺の自然環境が大きく異なる。

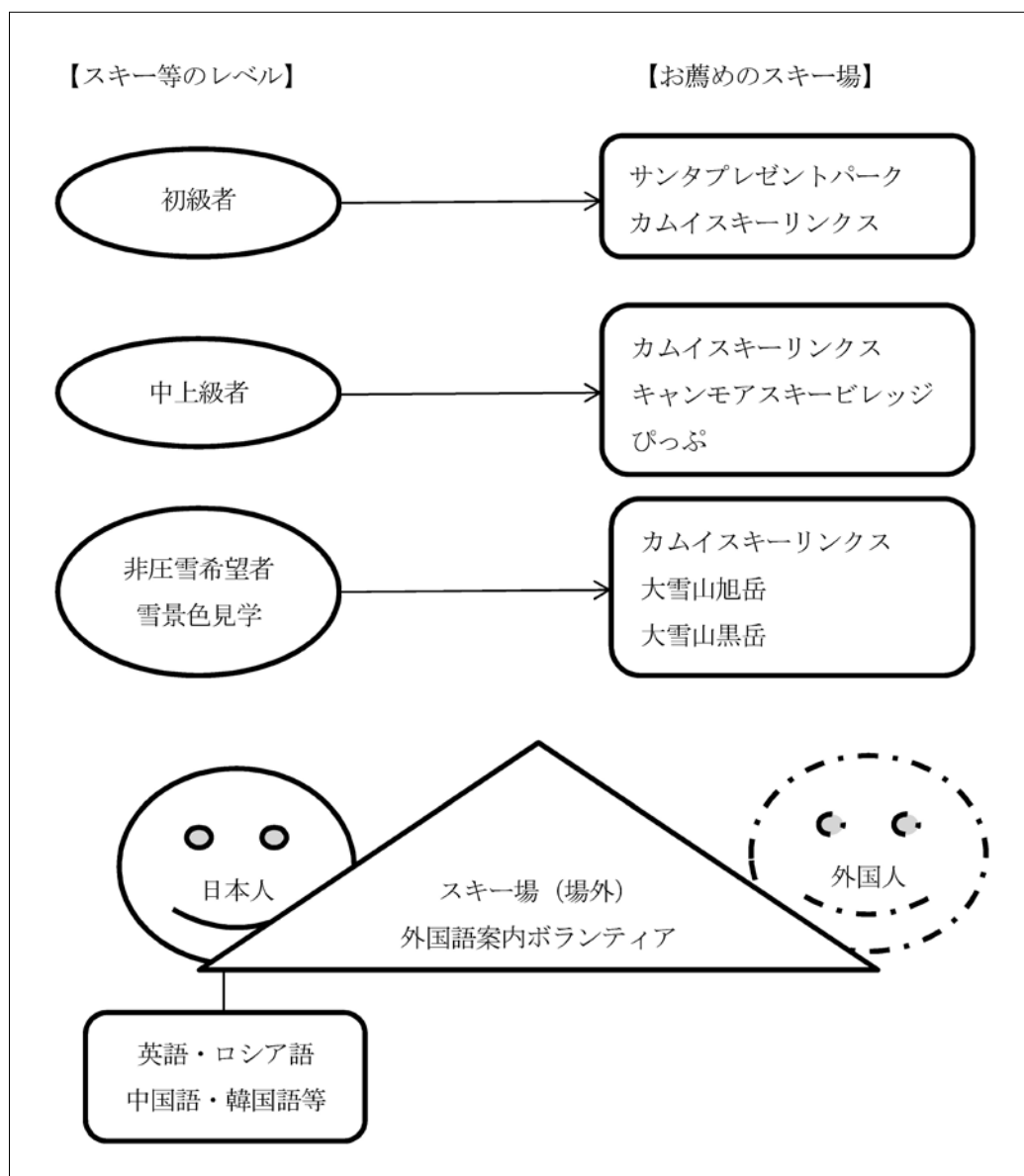
リフトでは、大・中規模で、数・種類が多いまたは全長が1000m以上を有する。また、コースも、概ねレベルに応じて、設置されている。他方、小規模の場合、ロープリフトが主体であり、コースは短く、レベルは初級向けとなっている。すべてのスキー場では、スキーは

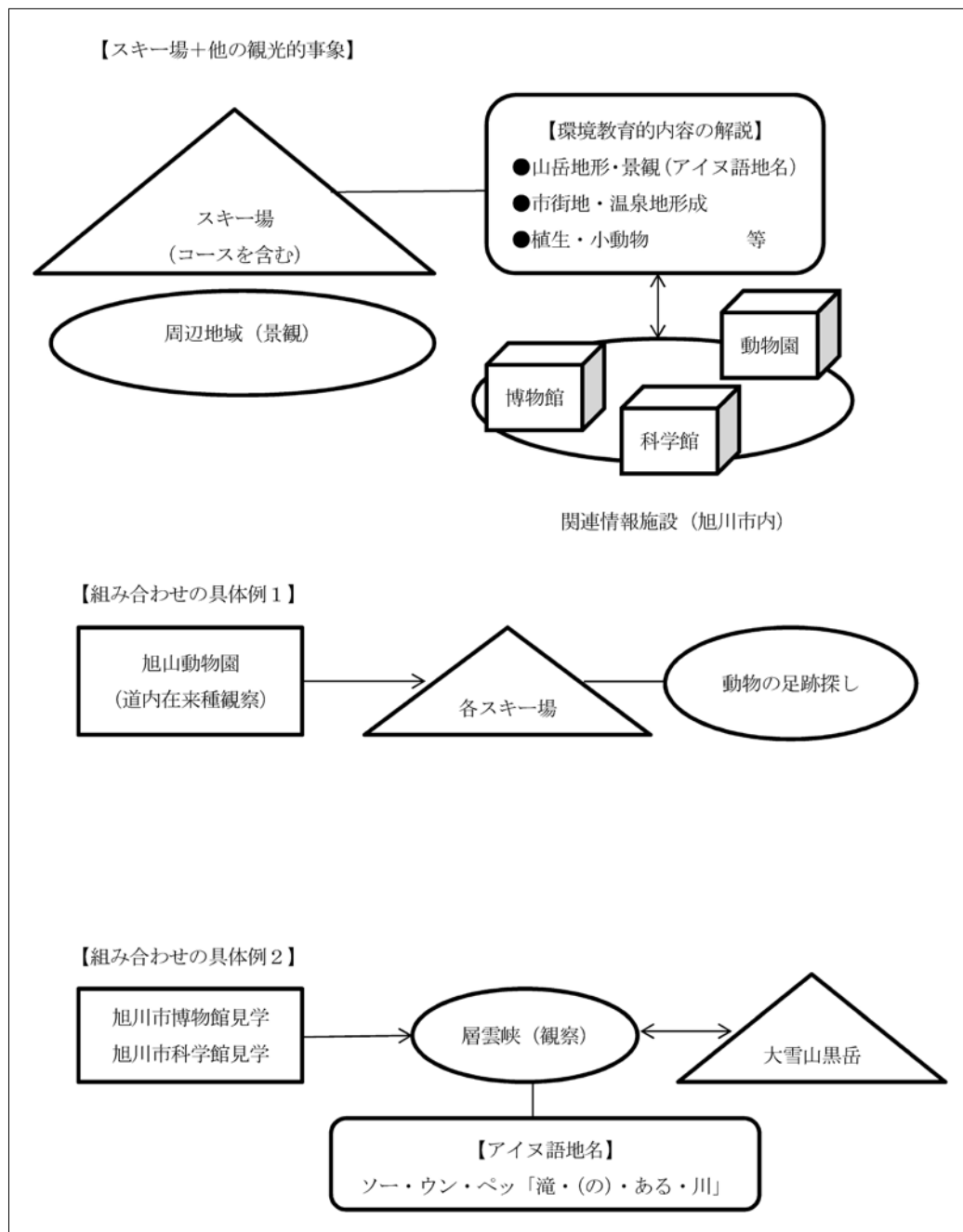
もちろんスノーボードの滑走が可能である。

以上から、旭川地域におけるスキー場は、多様性を有し、様々なニーズの客層に応えることが可能と判断できる。

2 取組の方向性

ここでは、前節までの内容をふまえ、スキー観光地域づくりについて、スキー場自体と

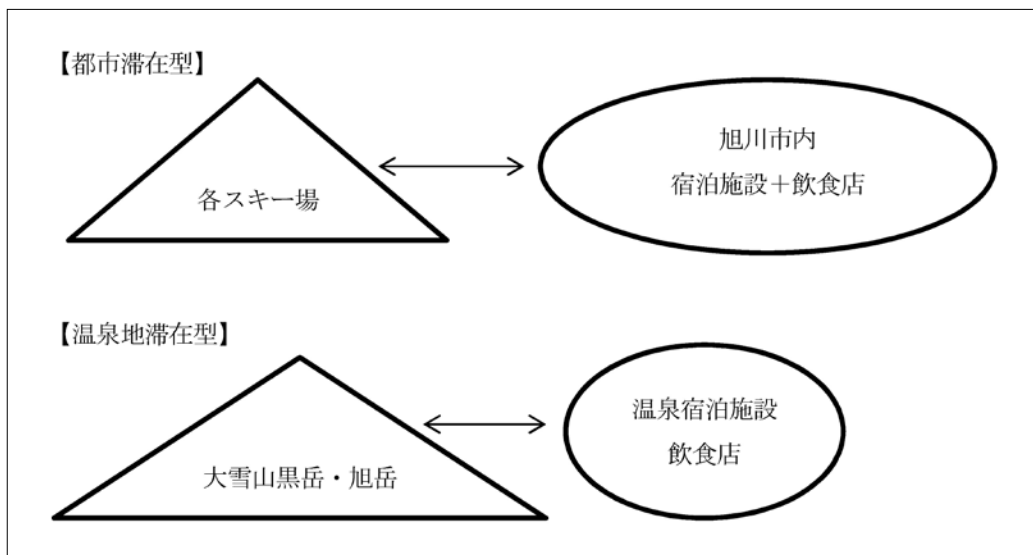




スキー場・他の観光的事象の組み合わせという視点で、インバウンド・ツーリズムの可能性を示す。

スキーやスノーボードのレベルに応じた場合、初級者は、サンプレゼントパーク、カ

ムイスキーリンクス、中・上級者は、カムイスキーリンクス、キャンモアスキービレッジ、びっぷといったスキー場をお薦めしたい。初級者の場合、伊の沢などの小規模スキー場の選択もあるが、一定数が押し寄せることで思



わぬ混雑となりかねない。そのため、初級コースを有する中規模以上のスキー場が最適と考えた。加え、非圧雪希望者（バックカントリースキー）や雪景色見学の場合、カムイスキーリンクス、大雪山黒岳・旭岳といったスキー場をお薦めしたい。とりわけ、雪景色見学では、ゴンドラリフト、ロープウェイの存在が重要である。これらを利用することで、乗車中も、安心して景色を楽しむことができる。

外国人観光客の増加に伴い、日本人による外国語案内ボランティアの役割が高まろう。取組の構想では、留学生による案内ボランティア案を示していたが、十分な人員を確保できるとは限らない。それに対して、語学を学習している日本人の高校生や大学生をはじめとする若年層などに、その役割を担う可能性が現実的であろう。日本人には、語学学習としての役割も期待できる。課題があるとすれば、英語以外の場合、適任者・数を確保できるかといった懸念はある。

スキー場と他の観光的事象の組み合わせでは、スキー場及び周辺地域を含む環境教育的

な内容の解説が考えられる。索道施設やスキー場内の施設、コース上（スキー等の滑走途中）では、貴重な自然景観の様子がみられる。例えば、山岳地形・景観、温泉地・市街地形成、植生・小動物の解説である。直接的・空間的に捉えることで、解説に深みが増す。また、旭川市内の動物園、科学館、博物館を事前見学することで、動物の足跡探し、アイヌ語地名（自然景観）の意味の認識といった発展的な連携観光のあり方も考えられる。とりわけ、スキー場内には、無数の動物の足跡をみつけられる。その足跡の形や大きさを手がかりに、冬季でも逞しく生きる動物の様子を感じることができるであろう。

外国人観光客の場合、必然的に宿泊を伴う。旭川地域では、都市型滞在と温泉地滞在型に分けられる。都市型滞在では、宿泊と飲食（とくに夕食）を切り離すことが可能であり、欧米豪の観光客が好む行動となりやすい。温泉地滞在型では、層雲峡温泉を中心に温泉街の再整備をしており、外国人観光客のニーズに合う改善をすすめてある。

V おわりに

以上、本稿では、研究対象地域として、旭川地域における都市型スノーリゾート構想を取り上げ、現状のスキー場の実態を明らかにし、どのようなスキー観光地域づくりが望ましいか、提案しようとするものであった。とりわけ、インバンド・ツーリズムに焦点を向けた。

具体的には、現在の北海道におけるスキー場の分布と特色に触れ、旭川地域における都市型スノーリゾート構想の背景、取組の概要を述べた。続いて、圏域のスキー場の実態を明らかにし、最後に、スキー場自体とスキー場と他の観光的事象の組み合わせとして、いくつかの提案を行った。

とりわけ、提案内容は、すでに他の地域で見られる場合もある。他方、環境教育的な内容の解説のように、地域が異なることで、内容が相違することはあろう。こうした差異は、観光の魅力を高めることに役立つ。加え、旭川市の都市規模は、観光行動する上で空間的に都合がよい。すでに述べたように、一つは、都市（市街地）とスキー場、空港の距離の近接性である。また、スキー場の立地が、適度に分散している点も強みと判断できる。もう一つは、一定数の宿泊施設数と飲食店数が都心部に分布することである。その結果、外国人観光客の興味関心に応じて、ある程度、入り込みを分散・調整できる受け皿を有している。

優先すべき課題は、都市（都心部）とスキー場、スキー場間を結ぶ公共交通機関の充実である。レンタカーの利用は、増加しているものの、冬季を考えると不慣れな外国人は多い。

今後、旭川地域の都市型スノーリゾート構想が、どの程度まで、達成できるか見守りたい。その上で、進捗状況を見定め、新たな提案やより内容の具体ができればと考えている。

注

- 1) 日本版DMOとは、観光地域づくり推進法人の略称である。本法人は、観光客を呼び込むための市場調査や観光資源などの運営管理を重視する観光振興組織。DMO候補法人として、国に登録されると、2020年度まで地方創生推進交付金を受けられる。2017年の8月時点で、候補法人は全国157件ある。そのうち、登録法人は、41件（2017年11月末時点）となっている、2020年度までに100法人を認定する方針。
- 2) 北海道索道協会（北海道ロープウェイ・スキー場協会）北海道スキー場ガイド2017-2018。
- 3) 2017年11月30日付北海道新聞朝刊記事31頁。
- 4) 大雪カムイミントラDMO資料によれば、2016年度実績は、旅行消費額42.0（千円）、延べ宿泊者数1685（千泊）、リピーター率62%であった。

文 献

- 菊地達夫（2008）：ニセコスキー観光地域における変容の実態，観光研究論集第7号，pp.37-43。
- 菊地達夫（2009）：ニセコスキー観光地域における外国資本の進出と計画内容の影響，観光研究論集第8号，pp.23-31。

菊地達夫 (2011) : 金融危機以降におけるニセコスキー観光地域の実態—北海道遺産選定の意味を視野に入れながら—, 北翔大学北方圏学術情報センター年報第3号, pp.137-142.

呉羽正昭 (2017a) : 日本のスキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズムの発展—複数リゾートの比較分析—, 日本地理学会発表要旨集, p.41.

呉羽正昭 (2017b) : 『スキーリゾートの発展プロセス—日本とオーストリアの比較研究』 二宮書店.

名倉一季ほか (2017) : 野沢温泉村におけるスキー観光の変容—インバウンド・ツーリズムの展開に着目して—, 地域研究年報第39号, pp.65-89.

渡邊瑛季ほか (2017) : 長野県飯山市太田地区におけるスキー観光地域の変化—スキー観光停滞期の就業形態に着目して—地域研究年報第39号, pp.41-63.